

平成30年度
研究紀要
第32号

「学習障がいのある児童生徒への適切な支援の在り方について
～通常の学級及び通級指導教室における合理的配慮～」

実践事例集

北海道立特別支援教育センター
Hokkaido Special Needs Education Center

はじめに

当センターでは昨年度、発達障がい教育室及び自閉症・情緒障がい教育室が中心となり、重点研究として、研究紀要第31号「学習障がいのある児童生徒への適切な支援の在り方について～通常の学級及び通級指導教室における合理的配慮～」を発刊しました。

本研究では、昨年度の研究成果を踏まえ、通常の学級及び通級指導教室において指導を受けている学習障がいのある児童生徒への適切な指導の充実に資する指導方法について調査を行い、「本人の心情を深く聞き取り、障がいの特性の理解や適切な支援方法に関わる手掛かりを得ること」や、「本人の実態に応じた学び方で学習を積み重ね、達成感や成就感を得るとともに、学ぶことへの意欲を引き出すこと」などの視点で実践事例を収集し、取りまとめております。

本研究紀要としてまとめた実践事例集は、学習障がい又は学習障がいの疑いのある児童生徒のほか、通常の学級に在籍する読み書きやコミュニケーションに困難さのある児童生徒への指導実践を紹介しており、これらの児童生徒の在籍する小学校、中学校、高等学校、学習塾の取組内容の特徴についても、「取組のポイント」として、分かりやすくまとめています。

各学校においては、特別支援教育の充実・発展に向けた取組の参考としていただけるものと考えておりますので、本研究成果を、各学校の実践や研究・研修活動に御活用いただくとともに、御活用の中でお気づきになった点等について、忌憚のない御意見をお寄せいただければ幸いです。

最後に、本研究の推進に当たり御助言・御協力をいただきました研究協力校及び関係機関の皆様には厚くお礼申し上げます。

平成31年3月

北海道立特別支援教育センター所長

小原直哉

もくじ

事例A 「心理的サポート」に着目した事例
江別市立大麻東中学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

全校で取り組む中学校の通常の学級における合理的配慮の実践
～全体への配慮及び個別の支援の検討～

事例B 「コミュニケーション」に着目した事例
北海道大樹高等学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5

コミュニケーションに困難さのある生徒への合理的配慮の実践
～コミュニケーション力の向上及び学校生活への波及～

事例C 「読み」に着目した実践事例
夕張市立ゆうばり小学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9

通常の学級と通級指導教室の連携による合理的配慮の実践
～読みの流暢性を高める支援について～

事例D 「書き」に着目した実践事例
自立支援型学習塾「みなソラ」・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13

書きを苦手とする中学生へのノートテイクを活用した支援の工夫
～キーワードマップによるノートテイクの実際～

事例A 「心理的サポート」に着目した事例

全校で取り組む中学校の通常の学級における合理的配慮の実践 ～全体への配慮及び個別の支援の検討～

江別市立大麻東中学校
(校長 神 守 一 志)

I 事例の概要

本校では、配慮が必要な生徒への取組として、全教科で共通して配慮することと、国語、社会、数学、理科及び外国語（以下、「5教科」）で配慮することとを整理し、学校全体で配慮することについて共通理解を図っている。

対象生徒は、書くことを苦手としており、板書を授業中に全て書き写すことが難しい場面がある。また、授業中に集中が続かなくなったり、教師の話聞き漏らしたりするなど、個別に配慮が必要な場合がある。

本事例では、中学生という生活年齢を考慮しながら必要な配慮を行うことができるよう、対象生徒の心理面を踏まえた合理的配慮の工夫について、取組を紹介する。

II 実践の内容

1 実態把握

(1) 「聞き取りシート」

対象生徒に対し、学級担任が7月に聞き取りを行った内容からは、次のことが読み取れる。

- ・心の中にあることを素直に教師に伝えることができていることから、対象生徒と教師との信頼関係が構築されている。
- ・授業中に分からないことがあると、他のことを考えてしまったり、頭が真っ白になったりすることを表現できる。また、テストの点数が予想に反して低かったことから、勉強の量を増やすことを考えるなど、自分のことを客観的に把握することができている。

好きなこと

- ・本を読むこと（漫画）

嫌いなこと

- ・勉強 ・字を書くこと ・トイレ掃除

授業中、考えていること

- ・国語で、勉強が難しいときは、「給食は何か」など、他のことを考えている。
- ・数学では、全く分からないときに頭が真っ白になる。
- ・英語では、「今、先生何て言ったんだろう」と思うことがある。

宿題について

- ・多くて嫌だなと思うことがある。 ・成績が落ちたら困るから頑張っている。

テストについて

- ・思ったより点数が低かった。難しかった。勉強する量を増やさないとダメだと思っている。

試したい勉強の仕方

- ・大事な語句を書いて覚えること

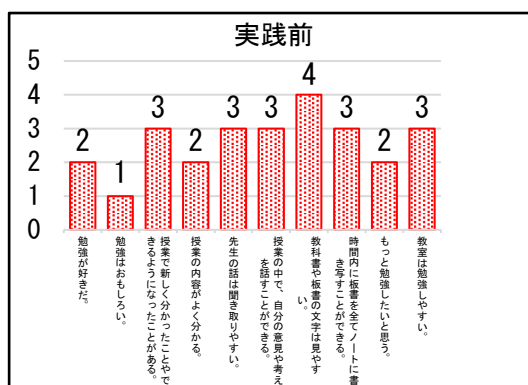
その他

- ・自分が先生に注意を向けていないとき、こっそり名前を呼ばれたら指示を聞くことができる。
(大きな声で言われるのは嫌だ)
- ・数学などで困ったとき、そばで教えて欲しい。
- ・聞き取れなかったときに、もう一度指示して欲しい。
- ・わざとではなくて失敗したときは、大きな声で怒らないで欲しい。

(2) 「授業について」シート

対象生徒に対し、学級担任が7月に行った「授業について」シートからは、次のことが読み取れる。

- ・「教科書や板書の文字は見やすい」が「4」であることから、日常的に分かりやすい板書を教師が心掛けている。
- ・「先生の話は聞き取りやすい」、「授業の中で自分の意見や考えを話すことができる」、「教室は勉強しやすい」などの得点が高いことから、日々の授業の中で、教師が学びやすい雰囲気づくりを意識した取組を行っている。



「授業について」シート

2 指導計画

(1) 教科指導における配慮

支援会議の内容	取組の方向性
・通常の学級における発達障がい等のある生徒への支援のためには、「全体への配慮」と「個別の支援」の両面から検討する必要がある。	・全教科で共通して配慮することと、5教科で配慮することをまとめ、支援につなげる。



【ポイント】

教科の特質と対象生徒の特性を考慮して、支援の方法を検討しています。

○ 全教科で共通して配慮すること

- 1 授業中に集中力を欠く場面があるため、他の生徒に分からないよう声を掛けることにより、授業への集中を促す。
- 2 文字を書くことが苦手で、整えて書くことが難しい。そのため、授業の中で、最後までノートに書けないことがある。できるだけ書き切れるように励まし、できたら褒めるようにする。
- 3 教師が指示した後で、内容を聞き取れていないようであれば対象生徒の近くへ行き、小声で再度指示する。
- 4 失敗した際に、大声で叱るのではなく諭すようにする。普段から興奮して騒ぐことがあるため、「〇〇君、姿勢を戻して」など、落ち着いた状態に戻せるような言葉を具体的に指示する。
- 5 授業道具の準備や整理整頓が苦手なため、授業の開始時に声掛けをする。5教科の道具ごとに仕分けしているケース全てにのりを置き、プリント類をその場で貼らせる。のりの補充は保護者に定期的に行ってもらう。

○ 5教科で配慮すること

- 【国語】 文法など言語事項に関する内容が最も苦手なため、ワークシートを工夫し、「ここまでできたら良い」など、スモールステップで指導する。物語文の読み取りには鋭さを発揮するため、褒めて自信を持たせる。
- 【社会】 暗記が得意なので、褒めて自信を持たせるようにする。新しい知識の定着が苦手なため、個別に具体的に指示する。
- 【数学】 分からないときには、そばで個別に教えて欲しいと望んでいるため、問題を解く際に個別に支援している。
- 【理科】 知識が多い分野であるため、褒めて自信を持たせる。プリントの整理整頓が苦手だが、理科ではプリントが重要であるため、個別に貼ることができるよう支援する。
- 【英語】 全体に指示を出し、他の生徒が作業している間に、個別に指示して作業させている。

○ 5教科以外の教科

上記の配慮を行いつつ、やりがいを持って取り組めるよう、今後も継続して支援を続ける。

(2) 得意な暗記を活用

支援会議の内容	取組の方向性
・対象生徒は暗記が得意だから、得意な面を生かした指導方法を考え、勉強に対する自信を持たせたい。	・問題の解き方をパターン化して示したり、有する知識を組み合わせたりすることなどについて、対象生徒と一緒に考える。



【ポイント】

生徒の得意なことに注目し、苦手な面を補うような工夫をしています。

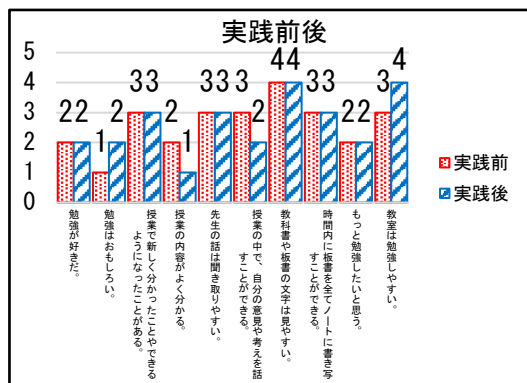
3 実践及び生徒の変容

(1) 学習意欲の向上

「勉強はおもしろい」、「教室は勉強しやすい」の項目が、1ポイントずつ上昇した。

「授業の内容がよく分かる」、「授業の中で、自分の意見や考えを話すことができる」の項目が、1ポイントずつ下降した。

これらのことから、学習内容についての理解には至っていないが、学習への充実感や環境づくりが進んでいることが分かる。



「授業について」シート

(2) 学習内容の理解

実践後の聞き取りにより、対象生徒から次の感想を聞くことができた。

社会科の地理の学習において、対象生徒が「地図」に興味を持つようになった。興味を持つものが見付かることにより、社会科という教科自体も好きになっていることが分かる。

嫌いなこと

- ・勉強は好きではないけど、社会は嫌いではなくなってきた。

授業中、考えていること

- ・全体的には、ボーッとしている時間は少ない。
- ・国語は、黒板前の席で先生と一緒にやったら良くできるので続ける。
- ・数学は、分からない。嫌だな、早く終わらないかなと思う。
- ・理科の実験は楽しい。教室で話を聞くときは分からないのでつらい。
- ・英語は、スペルや文法が分からない。早く終われと思っている。でも、英語のゲームは楽しい。
- ・社会では、地図に興味がある。楽しいので、続くといい。

宿題について

- ・多いのでつらい。家ではできない。
- ・一人でできないものは、先生と一緒にやってくれると嬉しい。

テストについて

- ・全然ダメだった。難しかった。
- ・国語は、前より少しできるようになった。

試したい勉強の仕方

- ・一人でやるより、放課後学習の日に、先生に教えてもらいながらできるといいかもしれない。

その他

- ・先生が大きな声で怒らないのは、これからも続けて欲しい。僕が先生の言葉に気付かないときに、怒らずに近くで教えてくれるので嬉しい。
- ・国語の席を前に移動して、先生が分かりやすく教えてくれるのは、とてもありがたい。
- ・数学が分からないので、たまに来てくれる補助の先生に、いつも来てほしい。
- ・理科は、実験だと楽しい。褒めてくれたので嬉しかった。
- ・授業の準備や整理整頓は、前は全然できなかったが、先生たちが怒らずに声を掛けてくれるので、だんだん自分からできるようになってきていると思う。

Ⅲ 実践の成果と課題

1 実践の成果

- 学校全体として対象生徒の立場を理解しようとしたことにより、学ぶことへの意欲を引き出すことができた。
- 「聞き取りシート」から、「前の席に移動したり、そばに付いたりして小さな声で支援する」、「スモールステップで関わり、できたら褒める」、「大きな声で叱らない」など、有効な支援を検討することができた。

2 今後の課題

- 授業における状況把握、声掛けなど、可能な支援を継続して行う必要がある。
- 教科の特質によって学びやすい方法が異なるため、教科ごとに対象生徒が学びやすい方法を模索する必要がある。

取組のポイント

☆ 全体への配慮と個別の支援の検討

❖ 障がいのある児童生徒への個別の支援と全体への配慮について

- 生徒自身が望む合理的配慮の実現
 - ・「聞き取りシート」の使用による対象生徒の思いの把握
 - ・全教職員が合理的配慮の意義と効果を共有し、共通した支援の実施
- 学校全体での取組
 - ・「好意に満ちた言葉掛け」の研修と共有
 - ・温かい学級、温かい学校づくりが全ての生徒に対する最大の支援
- 特別支援教育の視点を取り入れた授業改善
 - ・授業のユニバーサルデザイン化の全教職員による実施
 - ・個別の支援を全体の授業に取り入れる工夫
- 校長のリーダーシップ
 - ・学校の重点教育目標に「共生社会」に関係する内容の位置付け
 - ・教職員、生徒、保護者が一体となった優しさあふれる学校づくり

☆ 参考となる考え方

障がいのある児童生徒にだけ配慮をするのではなく、全体への配慮を大切にし、その配慮を共有し、全校で行う必要性を考える。

事例B 「コミュニケーション」に着目した事例

コミュニケーションに困難さのある生徒への合理的配慮の実践 ～コミュニケーション力の向上及び学校生活への波及～

北海道大樹高等学校
(校長 金田 英司)

I 事例の概要

本校は、対人関係に課題のある生徒や、コミュニケーションに苦手さのある生徒が在籍していることを踏まえ、平成27年度から3年間、文部科学省研究指定事業「高等学校における個々の能力・才能を伸ばす特別支援教育」を受け、高等学校における通級による指導に取り組んできた。

今年度は、これまでの取組の成果を踏まえ、自己理解を図ったり、対人関係や集団生活でのルールやマナーを学んだり、自分の将来について考えたりする「放課後活動」として実施している。

本事例では、校内推進体制における各グループ（教務、生徒指導、進路指導、サポート）が全生徒を対象とした取組と、コミュニケーション力の向上に向け、対象となる生徒への「放課後活動」の取組について紹介する。

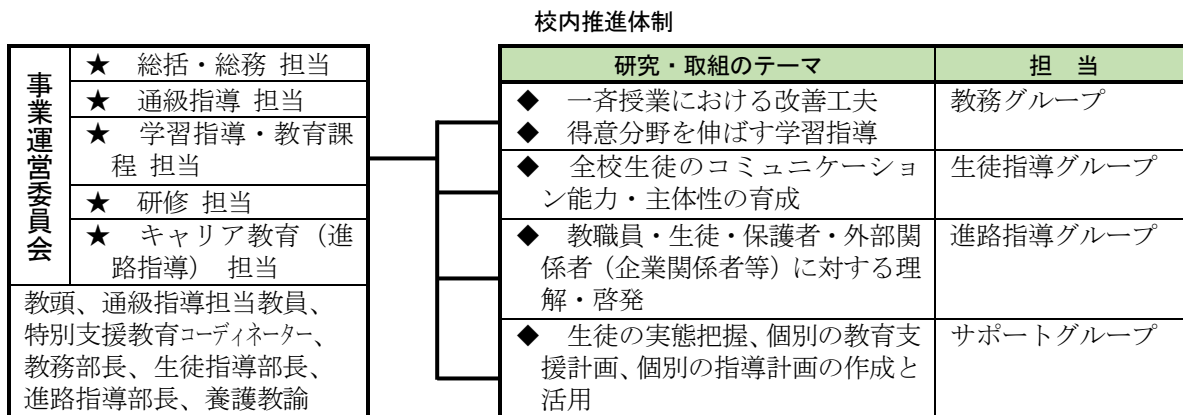
II 実践の内容

1 取組の計画

(1) 全生徒を対象とした取組

ア 校内推進体制の確立

取組の全体総括に当たる事業運営委員会の主導の下、全教職員が分掌を基本として研究グループに所属し、「通級による指導」を含めた特別支援教育の充実に向けて、全校体制での取組を推進した。



イ 教務グループの取組

(ア) 「大樹高校版UDチェックリスト」

- 一斉授業における指導方法や教室環境等の工夫改善について、ユニバーサルデザインの視点から見直しを行っている。
- 「ホームルーム担任用」と「教科担任用」があり、全教職員が毎月1回の自己点検に取り組んでいる。
- 「教室環境」、「ルール」、「関係づくり」（ホームルーム担任用のみ）、「授業の構成」、「発問や指示」、「板書・ノート」、「教材教具」について、それぞれ、4段階で自己評価を行っている。

教務グループの取組	1	整理の仕方や置き場所を定め、教室の整理整頓の仕方を見守っている。	4・3・2・1
	2	生徒の実態に合わせた座席の配置になっている。	4・3・2・1
	3	学習物の整理整頓の量に配慮している。（黒板、壁紙の掲示物など）	4・3・2・1
	4	1週間や1日の予定などのスケジュールを視覚的に見やすく提示している。	4・3・2・1
	5	急な連絡や予定の変更は、口頭だけでなく視覚的にもわかるようにしている。	4・3・2・1
	6	学習活動のルールをわかりやすく定め、指導している。（聞く、話す、書く等）	4・3・2・1
	7	学校生活のルールをわかりやすく定め、指導している。	4・3・2・1
	8	身の回りの整理整頓についてわかりやすく指導している。	4・3・2・1
	9	生徒の理解、生徒同士の関係の把握に心がけ、記録をつけている。	4・3・2・1
	10	生徒同士が学級のことや友達のことについて話し合える場を作っている。	4・3・2・1
	11	状況や相手に合わせたコミュニケーションやマナーについて指導している。	4・3・2・1
	12	生徒の発達について、本人又は保護者との相談をもとに指導している。	4・3・2・1

「大樹高校版UDチェックリスト」

(イ) 「大樹高校スタンダード」の構築

誰もが理解しやすい授業づくり、誰もが安心して参加できる学習環境づくりを目指して基本となる取組内容を作成し、全教職員の共通理解を図っている。

- 誰もが理解しやすい授業づくり（授業のユニバーサルデザイン化）
 - ・授業展開の構造化・焦点化
授業のねらい・見通しの提示、山場から逆算した授業計画 等
 - ・視覚化
タブレット端末・スマートフォン等のICT機器やワークシート等の効果的な活用、板書の工夫 等
 - ・作業化・共有化
ペアワーク・グループワーク等の協働的な学習や生徒が発表する場面の積極的な導入、ワークシート等の効果的な活用 等
- 誰もが安心して参加できる学習環境づくり
 - ・授業やホームルームにおける「ルールの明確化」
 - ・ホームルーム内における「生徒同士の相互理解」
 - ・教室内の時計の位置や教室前面に掲示を行わない等の「刺激の調節」
 - ・教室内の掲示板への掲示方法や物品の置き場所を指定する等の「場の構造化」

ウ 生徒指導グループの取組

(ア) コミュニケーションスキルトレーニングの実施

- ・全校生徒を対象として、学年段階に応じたコミュニケーションスキルトレーニングを体系的に実施している。
- ・お互いの違いを認め、個々を尊重し合うことへの理解を深めさせるなど、障がいの有無に関わらず誰もが安心して共に学び合える環境づくりに努めている。

学 年	目 標
第1学年	・個人を尊重し、思いやりの持てる集団を形成する。 ・自主概念を高めることができる。
第2学年	・自己及び他者理解を深めたり、クラス替え後の人間関係形成を促したり、その後の学校生活を円滑に進めたりすることができる。 ・最高学年に向けて、自己の感情のコントロールやトラブル・アクシデントの対処、回避など進路達成に必要なスキルを身に付ける。
第3学年	・自分と他者の個性を尊重し、互いの身になって考え行動できる集団づくり ・全員の進路実現への協力ができる集団づくり ・社会人として必要なことを考え、身に付ける。

(イ) 「子ども理解支援ツール『ほっと』」の活用

コミュニケーションスキルトレーニングによって、コミュニケーションスキルの向上を図ることができるかについて検証することを目的として実施している。

エ 進路指導グループの取組

(ア) 大樹高校スペシャルシリーズ「共生社会」

生徒、保護者、教員、地域住民に対するインクルーシブ教育システムや共生社会に関する理解啓発を図ることを目的として実施している。

【生徒の感想】

- ・「一人も仲間外れにしない教育」という言葉が印象に残った。
- ・ルールやマナーを守り、障がいのある人が快く暮らせる社会にしていかななくてはならないと思った。

(イ) リレー授業

認知面などを含め、多様な特性を持つ人々が、互いに理解し認め合いながら社会生活を送る「共生社会」について、様々な授業のアプローチから生徒の認識や理解を深めるこ

とを目的として実施している。

【生徒の感想】

- ・お互いを完全に理解することはできなくても、理解しようとするのが大切だと思った。
- ・自分自身について考えることは大変だったが、他の人が自分をどのように見ているのか知ることができた。

オ サポートグループの取組

(ア) 全教職員による生徒観察

チーム・ティーチング形式で、全教職員が通級による指導を担当することにより、生徒理解を深めることを目的に実施している。

【教師の感想】

- ・日頃の授業のときより生徒が生き生きとしていた。
- ・日頃の教科の授業では見られない生徒の一面を知ることができた。

(イ) 「個別の教育支援計画」及び「個別の指導計画」の作成

- ・「個別の教育支援計画、個別の指導計画の手引き」を作成し、全教員で交流した。手順を提示し、作成している。
- ・定例の職員会議において、前・後期の目標を交流した。
- ・成績会議において、前・後期の目標について交流した。
- ・単位認定会議において、後期の目標及び総括について交流した。

短期目標	指導場面	指導の内容・方法	評価
「コミュニケーション」 ・困ったときには適切に援助を求めることができる。	自立活動 (個別)	・様々な場面や状況にふさわしい行動の手本を見せたり、考えさせたりして徐々に人や環境を変えて取り組むようにする。	・場面が変わると自信をなくしてしまうことがあったが、困ったときには、一人で悩まずに教師や友達に相談や報告ができるようになってきた。
	各教科等	・困った場面で自分から行動するように促し、待つ。できたときには賞賛する。	・忘れ物をしたことを教師に伝えられないことがあったが、自分の考えや意見を発表する場面では、積極的に行動できるようになってきた。

個別の指導計画の作成例

(2) 対象となる生徒への個別の取組「放課後活動」

今年度実施している「放課後活動」における活動内容について示す。

ア 認知特性に応じた学習

支援会議の内容	取組の方向性
・自分の良い点に気付くとともに、他者の好ましい点について発言したり聞き取ったりすることができるようになって欲しい。	・自分が短所だと思っていたことも、見方を変えることにより長所になることを知り、自分自身を認める気持ちが持てるよう、「リフレーミング」や「トリセツ」などを行う。



【ポイント】

自分の良い所を他者に発見してもらうことにより、自己肯定感を高めるようにしています。

イ コミュニケーション力の向上

支援会議の内容	取組の方向性
・コミュニケーションの基本を学び、自分から働き掛けて関係を築く力を身に付けて欲しい。	・自分から行動し、質問することができるように、質問したらビンゴカードが開いていく「インタビュービンゴ」などを行う。



【ポイント】

学年段階に応じた系統的な「コミュニケーションスキルの指導」と関連付けて指導しています。

2 実践及び生徒の変容

(1) 認知特性に応じた学習

- ・ 自己の認知特性を理解し、得意な方法を生かした学習スタイルを身に付けたことにより、自分に適した方法を自ら工夫しながら、主体的に学習に取り組む姿勢が見られるようになった。
- ・ 教科学習において、漢字や英単語の小テストの点数が上昇するなど、基礎的な知識・技能の定着が図られ、学力面の向上が認められた。



「放課後活動」の様子

(2) コミュニケーション力の向上

- ・ 人前で話すことに自信がなかった生徒が、テーマに沿った内容で自身に関するエピソードや感情等を、他の生徒の前で堂々と表現できるようになった。
- ・ 友達関係をうまく築けなかった生徒同士が、互いに協力したり、助け合ったりできるようになった。
- ・ 「個別の指導計画」の目標を定期的に確認することにより、生徒が日常的に目標を意識して学校生活を送り、振り返ることができるようになった。

III 実践の成果と課題

1 実践の成果

- 「誰もが理解しやすい授業づくり」に向け、教職員間で日常的に授業参観を行うことにより、学校全体で、「アクティブ・ラーニング+授業のユニバーサルデザイン化」の視点に基づく授業改善を行うことができた。
- チーム・ティーチング形式で、全教職員が通級による指導を担当することにより、教科の授業では見られない生徒の一面を知ることができ、生徒理解が深まった。

2 今後の課題

- 「一斉授業における改善工夫」と「得意分野を伸ばす学習指導」が取組のテーマである教務グループについては、ゴールが見えづらく成果が不明確になりがちである。
- 通級による指導の対象となる生徒自身に、特別支援教育の必要性を理解させることが難しい。

取組のポイント

☆ 教職員の特別支援教育に対する理解と組織的な取組

❖ 地域で目指す共生社会の推進

- 全校で取り組むインクルーシブ教育
 - ・ 全教職員による授業のユニバーサルデザイン化、UDチェックリストの活用
 - ・ 全校生徒へのコミュニケーションスキルトレーニング、地域と行う共生社会の理解啓発
 - ・ 全教職員によるチーム・ティーチングを活用した通級による指導

☆ 参考となる考え方

全教職員で生徒が学ぶ環境を整え、授業改善に取り組むこと、地域が一体となって共生社会へ向けた取組を推進することの必要性を考える。

事例C 「読み」に着目した実践事例

通常の学級と通級指導教室の連携による合理的配慮の実践 ～読みの流暢性を高める支援について～

夕張市立ゆうぱり小学校
(校長 米本 智)

I 事例の概要

対象児童は、生活面全般において、特に困っていることはなく、体を動かすことが得意で、学校の友達と楽しく会話したり、遊んだりすることができ、対人関係は良好である。

一方、学習面では、教科書を読む際に、指で文字を追いながら読むことがあり、どこを読んでいるのか自分で分からなくなることがある。また、算数の計算は得意だが、文章題が苦手であるなど、文字や文章を読むことに困難さがあることから、通級指導教室を週に1回利用している。

本事例では、読みの苦手さに対する支援の方法と、通常の学級と通級指導教室の連携による合理的配慮の提供について紹介する。

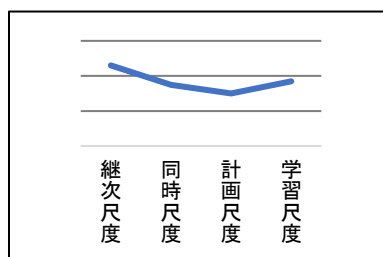
II 実践の内容

1 実態把握

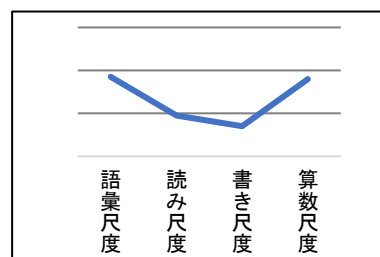
(1) 心理検査

「心理・教育アセスメントバッテリー日本版KABC-II」を実施した内容からは、次のことが読み取れる。

- ・物事を理解する程度を示す認知総合尺度は高いが、身に付けた知識や技能の程度を示す習得総合尺度が低いことから、学習に必要な認知能力はあるが、学習内容が定着しにくい傾向がある。
- ・「読み尺度」と「書き尺度」が他の項目に比べ、明らかに低い。
- ・学びの方法としては、複数の刺激をまとめて全体として捉えることより、連続した刺激を一つずつ順番に処理する方が得意な傾向がある。
- ・語彙力があり、語彙に関する知識や理解力、表現力が高い。



認知尺度



習得尺度

(2) 「聞き取りシート」

対象児童に対し、通級指導教室担当教員が聞き取りを行った内容からは、次のことが読み取れる。

- ・担当教員の話聞いて勉強しようとしている。
- ・文字の大きさが読みやすさにつながる。

好きなこと

- ・バレーボール
- ・テレビ
- ・算数 (特にかけ算)

嫌いなこと

- ・国語 (特に漢字を書くこと)、平仮名と片仮名を区別して正しく読むこと。
- ・他の行を隠して1行ずつ読むこと。

授業中、考えていること

- ・勉強に集中している。

勉強で困ること

- ・先生が早口で何を言っているのか分からないときがよくある。
- ・分からない問題があると困る。

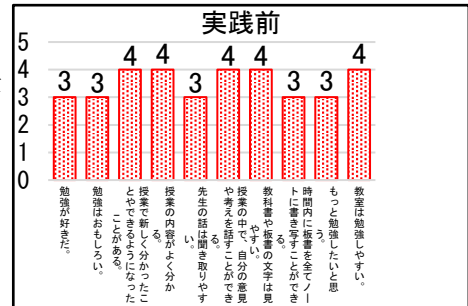
その他

- ・文字は大きい方が読みやすい。

(3) 「授業について」シート

対象児童に対し、通級指導教室担当教員が行った「授業について」シートからは、次のことが読み取れる。

- ・どの項目も3ポイント以上となっており、授業における充実感や学習意欲を失っていない。



「授業について」シート

(4) 視線計測

パソコン画面上の視線の位置を表示できるアイトラッカーを活用した視線計測の結果からは、次のことが読み取れる。

ア 読みの流暢性

- ・読みの速度は、平均に比べて遅かった。
- ・遅延と逐次読みが見られた場合には、一定数の誤反応（誤読）があった。
- ・文字を一字ずつ正確に読むことを苦手としていた。
- ・自分で文章を読んで内容を理解することは難しい様子が見られた。

イ 読みの正確性

- ・特に説明文では誤反応の数が多いことから、滑らかに文章を読むことが苦手である。
- ・詩は、不規則な語句や音の表現などがあるためか、読み間違いが見られた。

2 指導計画

(1) 読みの流暢性を高める指導

支援会議の内容	取組の方向性
・単音、特殊音節の読みの流暢性が低く、読みの正確性も低いことから、まずは一文字ずつの読みを素早くできるようにしたい。	・学校ではフラッシュカードを、家庭では「ディスレクシア音読指導アプリ」を活用することにより、読みの流暢性を高める。



【ポイント】

単音連続読み検査を月に1回実施し、読みの速度の変化を把握するようにしています。

(2) 通級指導教室におけるテストの実施

支援会議の内容	取組の方向性
・実態把握の結果から、読み上げにより内容の理解が高まること分かったため、通級指導教室でのテストを継続した方が良いと思う。	・通級による指導において、通級指導教室担当教員による単元テスト等の問題文の読み上げや、口頭での回答を認め、問題の内容理解を図る。



【ポイント】

読みの苦手さを把握した上で、内容の理解を図ることに重点を置いています。

3 実践及び児童の変容

(1) 読みの流暢性を高める指導

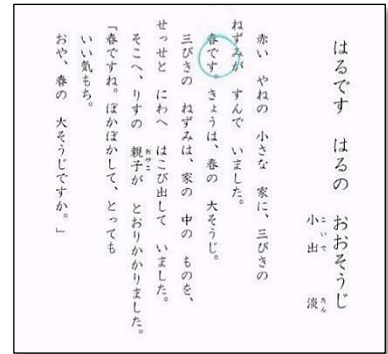
アイトラッカーを活用して、「読みの流暢性」と「読みの正確性」を計測し、実践前と実践後と比較した。

ア 読みの流暢性

- ・取組の前後で、読みの速度が上がっている。
- ・誤反応や遅延、逐次読みともに減少した。
- ・読み方の様子から、以前より慎重に読んでいる様子が見られた。

イ 読みの正確性

- ・読み間違いが減少した。
- ・詩では、読み飛ばしと勝手読みの回数が増加した。
- ・詩については、読んだあとの感想から、「意味が分かりづらいので読みにくい」とのことだった。



アイトラッカーによる視線計測

説明文「はるです はるの おおそうじ」における実践前後の比較

項目		実践前	実践後
流暢性	遅延	9	8
	逐次読み	7	0
正確性	読み飛ばし	3	1
	読み間違い	5	2
	勝手読み	0	1
	読めない漢字	0	0

項目	実践前	実践後
文字数	150文字	150文字
かかった時間	92秒	68秒
読みの速度	97.8文字/分	132.4文字/分

詩「はなが さいた」における実践前後の比較

項目		実践前	実践後
流暢性	遅延	6	2
	逐次読み	4	0
正確性	読み飛ばし	0	2
	読み間違い	3	1
	勝手読み	1	3
	読めない漢字	0	0

項目	実践前	実践後
文字数	78文字	78文字
かかった時間	73秒	51秒
読みの速度	64.1文字/分	91.8文字/分

(2) 通級指導教室におけるテストの実施

通級指導教室において、問題文を担当教員が読み上げ、対象児童が回答することにより、80点を取ることができた。

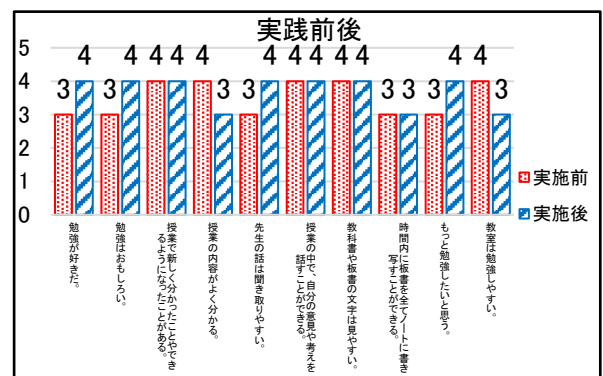
【通級指導教室担当教員の感想】

担当教員が読み上げを行わないときは、対象児童は問題文を最後まで読むことができないこともあったため、対象児童にとって、読み上げが有効であると実感している。

(3) 「授業について」シート

「勉強が好きだ」、「勉強はおもしろい」、「先生の話は聞き取りやすい」、「もっと勉強したいと思う」の項目が、1ポイントずつ上昇した。

「先生が早口で何を言っているのか分からないときがよくある」と話していたことを先生が受け止め、話し方を工夫していたことも伺ったことから、対象児童の特性に合った指導を行ったことにより、学習への意欲が向上したことが考えられる。



「授業について」シート

Ⅲ 実践の成果と課題

1 実践の成果

- フラッシュカードや「ディスレクシア音読指導アプリ」の活用による解読指導を継続したことにより、一文字ずつの読みの流暢性を高めることができた。
- 心理検査だけでなく、様々な方法を用いて実態把握をしたことにより、適切な指導方法に気付くことができた。

2 今後の課題

- 読みの流暢性を高めることができたことから、今後は、語彙力を高めながら、素早く単語を読む指導に移行する必要がある。
- 「聞き取りシート」で、「教室は勉強しやすい」の項目が減少したのは、「隣の子の話し声が気になる。」と対象児童が話していたことが考えられるため、周囲の環境も考慮した合理的配慮を検討する必要がある。

取組のポイント

☆ 適切な実態把握に基づいた合理的配慮の決定

❖ 通級指導教室における担当教員の「読み上げによるテスト」の実施

- 心理検査等を活用した継続的な実態把握
 - ・KABC-II、URAWSS-II、STRAW-Rの実施
 - ・1か月に1回の割合で「単音連続読み検査」による読みの流暢性の計測
- 心理検査等の結果と日常の学習状況を照合した総合的な分析
 - ・アイトラッカーを活用した「読みの流暢性及び正確性」の計測による読みの苦手さの把握
 - ・周囲の児童の会話など、学習環境の把握
- 仮説に基づいた指導方法の検証
 - ・「聞き取りシート」を活用した対象児童の学習上の困難についての理解
 - ・フラッシュカードやアプリの継続使用による単音読みの流暢性の向上
- 合理的配慮である「読み上げによるテスト」の妥当性を日常の学習状況から検証
 - ・読み上げをしない場合との得点の比較
 - ・「授業について」シートの実践前後の比較による学習意欲の向上
- 効果的な支援を継続するため、対象児童の特性を整理
 - ・KABC-IIの実施による認知総合尺度の優位性及び語彙力の高さ
 - ・読みの流暢性の低さによる読解の困難さ

☆ 参考となる考え方

読みや書きの苦手さに妨げられ、理解できないまま単元が終わることのないように、日常的な授業から支援の必要性を考える。

事例D 「書き」に着目した実践事例

書きを苦手とする中学生へのノートテイクを活用した支援の工夫 ～キーワードマップによるノートテイクの実際～

自立支援型学習塾「みなソラ」
(代表 松浦 靖高)

I 事例の概要

対象生徒は、友達が好きで、学校生活や部活動を楽しんでいる。また、機械や乗り物が好きで、そのよさなどを詳しく説明することができる。

一方、学習面では、板書を書き写すことがとても苦手で、授業で学ぶことを諦めてしまっている様子が見られるとともに、周囲の生徒の目が気になり、学校では「特別なことはしてほしくない。」という強い願いを持っている。

本事例では、保護者と学習塾の講師と連携し、学習塾での個別の指導を中心とした取組について紹介する。

II 実践の内容

1 実態把握

(1) 心理検査

「URAWSS II」を実施した内容からは、次のことが読み取れる。

- ・書き速度は評価C、読み速度は評価Aであった。
- ・黙読は早いですが、内容を理解することが難しかった。
- ・代替手段として、文章の読み上げがあると、内容の理解が高まっていた。
- ・書字については、字の間違いが多かった。
- ・代替手段として、パソコンによるローマ字入力も行ったが、入力した文字数は少なかった。

URAWSS II 評価表

<書き速度>	用いた手段	入力方法	書いた文字数	1分間の書字速度	評価
書き課題	手書き		65字	÷3分=21.6字	C
書きの介入課題	ワープロ	ローマ字入力	16字	÷3分=5.3字	C

<読み速度>	実施方法	読んだ文字数	読みにかった秒数	1分間の読み速度	評価
読み課題	個別実施	180字÷	25秒	×60=432字	A

内容理解問題	正答数	評価	本人の主観評価
読み課題 (自分で読んだ後)	3/6問中	4正解以下	4:どちらかといえば読んでもらう方が 分かりやすい
読みの介入問題 (代読後)	5/6問中	5正解以上	

(2) 「聞き取りシート」

対象生徒に対し、通級指導教室の担当教員が聞き取りを行った内容からは、次のことが読み取れる。

- ・対象生徒には、たくさんの夢や願いがあることが分かった。
- ・タブレットを活用することや、見やすい文字の大きさがあることについて客観的に理解している。

好きなこと

・バイク、自転車、アウトドア ・無線 ・スキー、スノーボード、釣り ・家業の手伝い

嫌いなこと

- ・サッカー以外の球技、絵を描くこと

大人になったら、やってみたいこと

- ・農業 ・結婚

困る勉強の仕方

- ・「書きなさい。」という勉強、小さい字で大量に書いた板書を書き写すこと

試してみたい勉強の仕方

- ・タブレットを使った勉強を試したいが、クラスメートから何か言われるなら使いたくない。

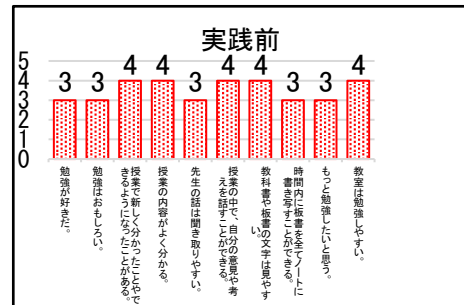
その他

- ・文字のサイズは25ポイントくらいが読みやすい。文字の隙間はなくても良い。教科書は字が小さ過ぎる。文字量が多いと見る気がしないが、3行程度なら大丈夫である。
- ・何の教科でもいいので、70点くらいは取ってみたい。
- ・地獄のような数学の宿題がなくなればいいと思っている。
- ・書くことは大嫌いなので、スマホを使って漢字の学習をしたい。
- ・農業について学べる高校に行きたい。高校受験のときに振り仮名があると助かる。農業に関わる内容がある「理科」を頑張りたい。早く面接の練習をしたい。

(3) 「授業について」シート

対象生徒に対し、学習塾の講師が行った「授業について」シートの結果からは、次のことが読み取れる。

- ・学習に対する項目が全般的に低い。
- ・授業の内容が分からないため、学習への意欲が低下している。



「授業について」シート

(4) 視線計測

パソコン画面上の視線の位置を表示できるアイトラッカーを活用した視線計測の結果からは、次のことが読み取れる。

ア 読みの流暢性

- ・読みの速度は、平均に比べて遅かった。
- ・遅延と逐次読みの回数からは、一定数の誤反応が見られた。
- ・文字を一つずつ正確に読むことを苦手としていた。
- ・自分で文章を読んで内容を理解することは難しい様子が見られた。

イ 読みの正確性

- ・特に説明文では誤反応の数が多く見られた。
- ・説明文と詩はどちらも、読みの正確性は低かった。
- ・記憶の中から予想して単語や言葉を読む「勝手読み」が多く見られた。

2 指導計画

(1) キーワードマップを用いたノートテイク

学校では、周囲の生徒の目が気になるという対象生徒の心情に配慮し、学習塾で具体的な支援に取り組む。

支援会議の内容	取組の方向性
<ul style="list-style-type: none"> ・字を書く際、字の形を覚えて書き写すことが、対象生徒にとってとても難しい。 ・実態把握の結果からは、視覚的な情報と聴覚的な情報の組合せで学習していく力や、それを保持する力、語彙に関する知識等があることが分かった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学習塾では、講師とやり取りをしながら、授業の内容の復習ができるよう、キーワードマップを用いたノートテイクについて練習を行う。



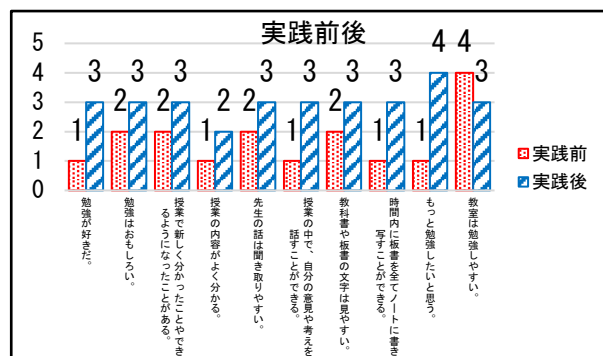
【ポイント】

対象生徒の得意な面を活用し、最適な支援方法を検討しています。

(2) 合理的配慮

学習塾の講師が問題文を読み上げ、対象生徒が口頭で回答したことを講師が代筆して学習した。

「教室は勉強しやすい」の項目以外は、全てポイントが上がった。読み書きの苦手さから、学ぶこと自体を諦めていた対象生徒が、取組の前と比べて、学習への充実感や達成感を向上させていることが分かる。



「授業について」シート

【学習塾の講師の感想】

対象生徒は書くことを苦手としているため、作文などは、本人にはとてもつらそうに見える。書きたい内容を口頭で伝えてもらえれば、私がパソコンで入力することもできるので、本人が持っている力を引き出してあげたい。

III 実践の成果と課題

1 実践の成果

- 「誰もが理解しやすい授業づくり」に向け、教員間で日常的に授業参観を行うことにより、学校全体で、「アクティブ・ラーニング+授業のユニバーサルデザイン化」の視点に基づく授業改善を行うことができた。
- チーム・ティーチング形式で、全教員が通級による指導を担当することにより、教科授業では見られない生徒の一面を知ることができ、生徒理解が深まった。

2 今後の課題

- 「一斉授業における改善工夫」と「得意分野を伸ばす学習指導」が研究・取組のテーマである教務グループについては、ゴールが見えづらく成果が不明確になりがちである。
- 通級による指導の対象となる生徒自身に、特別支援教育の必要性を把握させることが難しい。

取組のポイント

☆ 進路選択に向けた学習意欲の向上

❖ 読み書きに苦手さのある生徒への合理的配慮の決定

- 合理的配慮の決定に向けた本人との合意形成
 - ・読み書きの苦手さを補うための代替手段の決定に向けた合意形成
- 早期からの支援の必要性と学習意欲の向上
 - ・生活年齢や学校での状況を考慮した支援の実施と周囲への合理的配慮に対する理解の啓発

☆ 参考となる考え方

生活年齢や学校での状況を踏まえ、困難さを抱える本人の思いに十分に配慮し、合理的配慮の決定や見直しの必要性を考える。

研究紀要 第32号「実践事例集」

平成31年3月発行

発行者 北海道立特別支援教育センター

所長 小原直哉

〒064-0944

札幌市中央区円山西町2丁目1番1号

TEL (011) 612-6211 (代表)

FAX (011) 612-6213

URL <http://www.tokucen.hokkaido-c.ed.jp/>